
言の葉のチカラ

暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

言の葉のチカラ

【Nコード】

N1506V

【作者名】

暁

【あらすじ】

普通の人とは違うチカラ―言葉の実現化―と言う異端のチカラを持った少女。

少女は生まれ育った場所で人間扱いされず、親に虐待を受け続け、それを苦に、自殺したはずだった。

なのに、召喚？ 私は召喚獣？

ああ、あなたたちも、私を人間として扱ってくれないのか。ならば、誰も信じてない。

それなのに、自分を信じる？ 絶対に害を与えない？
そんなの、信じられるもんか。

私は、人を信じることなんて出来やしない。

愛を知らない少女が、愛を知り、生き方を知っていく物語。

——愛とは何か、知って欲しい。

忌み嫌いしはこの力

もう、いいと思った。

だから、自分で選んだ。

選んだ道の先には、何があるのか。

今よりもマシになるのなら、どうでもいいや。

少女は、そう考えながら、刃を心臓に突きたてた。

「おい、召喚獣如きが召喚主に逆らっていいと思っているのか!？」

ふざけてる。

『現れる、刀。その名は草薙剣』
クサナギノツルギ

少女が呟くと同時に、少女の手には、刀が握られていた。少女は迷うことなく、先ほど叫び声をあげた男の首にその刃先を当てる。

そして、冷たい目を向けながら、問う。

「何があつたのか、説明してもらえるかな？ 変なことしたら、殺すけど」

「ひっ!」

そう呟く少女の着ている服は、血で真っ赤に染まっていた。特に、胸の辺りは完全に真っ赤だった。

それは、現在少女に刃を向けられている男が少女を呼ぶ前からのこと。

そして、少女は、静かに男に告げる。

「説明を寄越せと言っているんだけど、分かっている？ ん、ああ、息が出来てないのかな？ じゃあ、酸素をあげようか」

『風よ、刃となりて、男の頬を切り裂け』

「ひいっ！」

少女が呟くと同時に、風が男に襲いかかり、男の頬を切り裂いた。

「ああ、きちんと喋れるね。なら、説明してよ。——何故、いきなり上から命令をしてきたのか、とかね」

少女は、考えていた。何故、自らの意思で死を選んだはずなのに、こんなよく分からない場所にいて、クソジジイに命令をされなくてはならないのか。

しかも、命令は「この場にいる全員を殺せ」。

——馬鹿馬鹿しい。そんなもの、自分には関係ない。

少女が正直にそう呟くと、男は激昂し、さらに命令を重ねてきた。そんな男に、少女が本気で怒ったことは、言うまでもない。

その結果が、今の状況だ。

「言ってること分かっている？ 分かっているなら、早く説明しろよ、クソジジイが」

『針よ、数多く出現し男の頭上に現れる』

少女は、刀を男に突きつけたままで、そう呟く。その瞬間、男の頭上にはありえないほど大量の針が現れ、今にも落下し、男を突き

刺しそうに待機していた。

「早く言わないと、針、落とすよ?」

「ひいいっ! 助けて! 助けてくれえっ!」

少女の冷たい目を前に、男は必死で命乞いをする。だが、少女にそれを受け入れる義理はなかった。

「いいから説明。しないと、本気で落とす」

その冷たい目は、言っていることは紛れも無く真実だと、否が応でも回りの人間に伝える。

その冷たい目は、何も感情を伴わず、ただ、男を眺める。

その冷たい目に、逆らえるものは、この場にはいなかった。――
ただ一人を除いて。

「待ってくれ」

そのただ一人とは、この国の国王。国王は、勇気を出して少女を止める。

そして、国王が声を掛けると同時に、少女はその冷たい瞳を王のほうへ向けた。

「何」

「その男には、謀反の疑いがかかっている。それは、この国を揺るがす大罪だ。説明は、我等が引き受ける。だから、殺すのは止めてもらえないだろうか。男は、この国の法で、裁かせて欲しい」

「…………――分かった」

しばらくは思案していた少女だったが、説明がもらえるのならば

その男からではなくても構わないらしい。男の上に出していた数多くの針と、少女の持っていた刀を消し、王のほうへ、「これでいいの?」という目を向ける。

そして、男が兵に捕らえられた瞬間、少女には限界が訪れた。

ただでさえ、死のうと考え、刃を自身の心臓に突きたてていた少女。

召喚によってその出血量が若干マシになっていたがために、何とか意識を保っていた少女。

怒りによるアドレナリンの大量放出のおかげで、痛みを感じずにいれた少女。

だが、さすがに限界だったらしい。

少女は、——静かに崩れ落ちた。

「んなっ！ おい、医師を呼べ！ 早く！ この国の恩人を、絶対に死なせるでない！」

放っておいてくれ。今度こそ死なせてくれ。

死ねるのならば、説明なんて必要ない。

私は、自分の意思で死を選んだ。

だから。だから。

——邪魔をするな。

忌み嫌いし色は、白

目を開けて、目に映る色は、白。私が人生に於いてもっとも嫌っている色。

白い色は清潔さを感じるとよく言うが、私にとっては邪悪な色でしかない。

白なんて、嫌いだ。白は、敵でしかない。白を仲間だと、味方だと思ったことは、ただの一度として、無い。

白は、私を人として扱わない。

白は、私を実験動物のようにしか扱わない。

白は、気持ちが悪くなる。

白は、穢らわしい。

なのに、どうして今はその白に囲まれているのか。

——キモチガワルイ。吐キソウダ。

そんな思いを感じながら、ふと思い出した。あのジジイも、白だった。

やはり、白は私を人間としては扱ってくれない。

白は、私を召喚獣と呼んだ。

白だった両親も、私を人間ではなく、サンドバッグとして扱った。私は、どの世界でも人間ではないのか。

だから、死んだのに。自ら死を選んだのに。
なのに、どうしてこんな場所にいる。

「ああ、目を覚ましたんですね。気分はどうですか？」
「気持ち悪い」

そうしていると、白の部屋の扉が開かれ、一人の女性が姿を現した。その女性は、にっこりと微笑みながら、問いかける。

それに、少女はあっさりと、自身の思っていることを告げた。
「気持ちが悪いと、白は嫌いだと。」

「あー、まあ、病室ですからね、我慢してください。もう少し傷が善くなったら、客間へ移動させるようにと、陛下は仰られておりましたから、もうしばらく辛抱してください」

女性はそう言いながら、少女の服を捲り、傷の様子を診ようとする。

だが、少女がそれを拒んだ。

「触るな。白は敵だ」

少女はそう言って冷たい瞳を女性に向けるのだが、女性は怯まなかった。怯むことなく、少女の傷を診、包帯をきれいに巻きなおしていく。少女は触れられないよう足掻こうとしていたが、それは、彼女が無理やり止めた。

そして、にっこりと微笑みながら、少女に告げた。その笑みは、怖い。

「勝手に人を敵認識しないでくださいね？ 私は医師として、死にそんな人を放っておけないんですよ」

「——うるさいっ！」

『吹き飛ばー！』

彼女は、使う。実の両親にさえも恐れられたその力を。言の葉にチカラを込めて、告げる。

そうすれば、彼女はその言葉の通り、吹き飛ばはずだった。――
何故、吹き飛ばない。

「あのねー、君、死にかけたってこと分かってる？ あなたの魔術がどういう原理か分からないけれど、その状態で魔力を使おうにも使えるはず無いじゃないの」

ただでさえ、体内から発する魔力量が、生きるために必要なレベルでしか放出されていないって言うのに。彼女が告げると、少女は驚いたように目を丸めた。

そんな少女の様子に、彼女は淡く微笑む。ようやく、年相応の表情を見ることができた、と。

「そういえば、自己紹介がまだでしたね。私は王宮医師のアレグラ・デア・クレメンス。あなたは？」

「モガミアキラ最上昭。最上が姓で、昭が名前」

「アキラ、ですか。いいお名前ですね」

アレグラはそう言って、アキラと握手をしようと手を伸ばすのだが、アキラはその手を避けた。が、アレグラは無理やり手を握る。

――その瞬間、アキラの表情は、とても嫌そうなそれになっていた。が、アレグラは容赦はしない。

アキラに、二度と死を選ばせないためにも、生きること执着をさせるために、何でもするつもりだった。

「さあ、自己紹介も終わりましたし、また、お休みなさい。傷が善くなるまでは、絶対にベッドから降りてはいけませんよ？」

「……知らない。どうでもいい。寧ろ、死なせろ」

「ダメです。——また後で、様子を見に来ますから、絶対に安静にしてください」

アレグラはそう言って、アキラの横たわるベッドを背に、扉へ足を向ける。部屋を出るときに、ふと、アキラのほうを見てみると、アキラは眠っていた。

その寝顔もまた、年相応なもので、何をしたらあんなに冷たい目が出るのか、本気で考えていた。——部屋を出るまでは。

「アレグラ。彼女はとうだったんです？」

「うわっ！ お、王子殿下っ！？ ……王女殿下まで」

アレグラが部屋を出ると、待ち構えていた王子と王女が、彼女を捕まえる。そして、アレグラは護衛についているはずの騎士を探し、あたりを見回すのだが、見当たらない。

「殿下、まさか、お二人だけでここまで来られたのですか？」

「ああ」

「うん」

二人のその答えに、アレグラは溜め息をつく。だが、そうしても何も変わらないと悟った彼女は、せめて仲間たちのいる場所へ、と二人を医務室へと誘った。

「で、彼女はとうだったんですか？」

「ひどいものです。胸の傷は、心臓を傷つけていましたし、魔力値も微弱。あの魔力値では倒れもするでしょうし、治るのに相当の時間を要するでしょう。肉体的には、こんな感じです」

「肉体的には、ということは、精神的にもかなり傷ついているのですか？」

「ええ。これは私の予想にすぎませんが、恐らく、彼女は人を信じる心を知らない。信じられない」

その言葉を聞いた王子と王女は、止まる。

人を信じられないと言うことは、どれだけ辛いだろう。人を信じられないのならば、人に頼ることも出来ない。すべて、自身が抱え込まなくてはならない。

それは、年端もいかぬ少女にとっては、重荷にしかない。

それ故か、アキラの体から放出される魔力は、アレグラがびつくりするほどに少なかった。よく、あの魔力値で生きていられたと思えるほどに。

だから、彼女は告げる。アキラを守るために、王子と王女ががつくりするような言葉を。

「ですから、もうしばらくは面会謝絶です。せめて、肉体的傷がもう少し癒えるまでは」

だから、殿下たちは、騎士たちをこれ以上心配させないように、自室に戻りましょうね？ アレグラは彼女特有の威圧感ある笑みを浮かべながら、二人の背中を押し、部屋へと足を向ける。

もうしばらくしたら、またアキラという幼い、可愛そうな少女の様子を見に行かなくては、と思いながら。

使えない忌み嫌いし力

何故、あの時あの力が使えなかったのだろうか。私のこの忌み嫌っている力は、使って欲しくないときに限って、使われてきた。

大きくなつてからは、コントロールを覚えられたから少しはマシだったが、それでも、何も変わらなかった。

両親は、私をいないものとして扱い、時には、理不尽なほどの暴力を振るって来た。もちろん、私がその力を使えないよう、口をガムテープで塞いだ上で。

何で、こんな力があるのか。

小さい頃は、何度か医者に診せられ、いろいろな検査を受けることになったが、それでも、何も分からなかった。

医者に診られている間、私は人間ではなかった。ただの実験動物にすぎなかった。

だから、死んだのに。

私のもつとも忌み嫌っているこの力で刀を召喚し、この心臓に突きたてたはずだった。

普通ならば、それで死ねたはずだった。

それなのに、どうして、私は召喚などされているのだ。

私は、召喚獣。あの世界では、私は実験動物。この世界では、召喚獣。

私が、人間として生きられる世界は、どこにも無い。

なら、この世界でもまた死を選ぶほう。

それか、忌み嫌っているこの力で、元の世界に戻って、それから再び死を選ぼう。

あの日、私は遺書を書いて死んだ。

そこには、両親の虐待を包み隠さず書いた。

あの両親も、無事に生きてはいられまい。それが、長年虐待を受け続けた娘からの、些細な逆襲だ。

私は命をかけて、あいつ等から平凡を、幸せをもぎ取ってやる。

だから、死ななくちゃ。

そう思うのに、何故か、この忌み嫌っている力は、今は使えない。

言の葉に、きちんと、嫌って言うほどに力を込めて唱えているのに、その言の葉は実現しない。

ねえ、言の葉の力。今まで私からさんざん幸せを奪ってきたのに、どうして、肝心なときに私から離れていくの？

私は、死にたいのに。そのためには、この力があるのに。どうして。どうして。

アレグラが再びアキラの様子を見に来てみると、アキラは眠っているようだった。静かな寝息が、室内に響く。

そして、アレグラが少女の様子を見ようと、服に手をかけ、傷を露出させようとした瞬間に、彼女の目が突然開かれる。そして、服に手を掛けていたアレグラの手は、弾き飛ばされた。

弾いたのは、アキラの手である。そのアキラの息は、あれだけの動作で既に切れているが。

「さ……わかるなっ……。お前は、……敵……だっ！」

そんなアキラに、アレグラは哀れみの目を向ける。

つい先ほどまで、静かに、気持ちよさそうに眠っていた少女。この少女は、寝ているときに誰かが触れるだけで、いつも目を覚ましていたのだろうか。

そうしなければ自分の身が守れないほど、過酷な状況にこの少女はいたのだろうか。

少女のまわりには、こんなにも幼い、十歳くらいにしかならない子供を守ってくれる人が、存在していなかったのか。

「大丈夫。私は敵ではありません。あなたに危害を加えるつもりは全くありません。だから、落ち着きなさい」

「嘘だっ！ 全員そう言っても、最後には手のひらを返すっ！信じられるもんかっ」

「信じてください！ 世の中には、あなたを傷つける人間だけじゃない、守る人間もいます！ 私は、全力であなたを守りますから！」

「信じられるもんか！ もういい！ 黙れ！」

「あなたが信じてくれるまで、黙りません。信じてください。もし、私があなただけを傷つけるようなことがあったら、殺していただいて結構ですから」

アレグラのその言葉に、今までずっと叫んでいたアキラの聲が、止まる。そして、静かに問いかけた。

「——本当に、いいの？」

「かまいません。それで、あなたが信じてくれるのならば」

「………努力する」

その言葉に、アレグラはホツとする。そして、先ほどアキラの手によって中断された診察を、続行するために服を捲り、包帯の上から、傷の様子を診る。

アレグラの治癒魔法はその魔力を以って、アキラの状態が、依然として善くなっていないことをアレグラに知らせる。

「今度こそ、ゆっくり休んでください。——さっきは、殆ど休めていないのでしょうか？」

アレグラはそう言いながら、アキラの額に手を向ける。が、その瞬間、アキラは体をびくつかせた。だが、すぐに元に戻る。

既に、先ほど言った努力と言うものをしているらしい。

そんな様子に微笑ましく思ったアレグラはアキラの額に手を触れ、火照った額を冷やしてやるのであった。

——アキラが、疲れて寝入るまで。

そして、アキラが寝入った後は、彼女は王へ報告に向かう。この国の恩人の様子を報告するために、王の執務室へ足を向けるのであった。

「どうだった？ 大丈夫なのか？」

アレグラが王の執務室に着くと、それを待っていた王は、挨拶も抜きに、アキラの様子をアレグラから聞きだそうとする。

「大丈夫とは、言い難いです。胸の傷も深いですし、それよりも精神的ダメージが深いです」

アレグラのその言葉に、王のみならず、王妃、宰相すらも、一時的に行動を止める。

アレグラは、その様子に気づきながらも、敢えて話を続けた。

「まず、出血量が多すぎました。その結果か、体内から感じる魔力値が恐ろしいほど低く、一命を取り留めたことが奇跡だと言うくらいに、今も低いままです。ですので、回復にはかなりの時間がかかると思われます。それと、精神的ダメージですが、それは、彼女が相当幼いときから溜め込んできていたものだと思われます」

——今の彼女は、人を信じる事が出来ません。

「恐らく、誰からも守ってもらったことが無いのだと思います。だから、他人を信じると言う心が、形成されなかったのでしょうか」

人は、幼児期に与えられる、親からの無償の愛によって、人を信じる心を形成する。だが、アキラにはそれが無い。

人を信じられない。誰にも守ってもらえない。自分で自分を守らなければ、生きていけない。

だから、アキラは眠っているときに誰かが触れたりすると、瞬時に目を覚ます。そうしないと、生きていけなかった。生きるために、アキラはそんな方法を覚えてきた。

そうしていると、アレグラには、不意についさつきまで見ていた魔力の脈動を感じた。嫌な予感しかしない。

アレグラは急いで王に許可を取り、アキラに当てられた病室へ向かう。

そこには、言の葉の力を暴走させたアキラが、感情のこもらない目をして、そこに立っていた。

忌み嫌いしは、ヒト（前書き）

暴走です。

魔術（？）です。

言葉の力は恐ろしいですよw

忌み嫌いしは、ヒト

人なんて嫌いだ。人なんて、信じられない。

アレグラと名乗った女性が消え去った部屋で、私は思う。

何が、信じてだ。信じられるはずが無い。人は、裏切る生物だ。それを知っていて、信じられるはずも無い。

忌み嫌いし私の力。もう、使えないのか？

でも、あのクソジジイをやっつけるときは、使えた。

今は消え去ったのか？ 使えないのか？

だから、呟く。忌み嫌いしその力を。

言の葉に、力を込めて。

『日本へ、帰せ』

その瞬間に、何かを感じた。でも、それが何だったのか、よく分からない。

だって、私の記憶は、それが最後だから。

アレグラの見たアキラは、何の感情もこもらない瞳で、ただただ、言の葉に力を込めて、呟く。

『切り裂け』

その瞬間、つい先ほどまでアレグラの立っていた場所は、ぱつく

りと裂けていた。それを診たアレグラは、完全に危険だと判断した。そして、魔術を使い、城の兵に助けを求める。これは、自分だけの力では、なんとも出来ない。

「この国の恩人である少女の力が暴走しました。至急、応援願います！」

アレグラは暴走したアキラの言の葉の攻撃を避けながら、隙を伺う。

きちんとコントロールをしなければ、命に関わる魔力。今のアキラは、その魔力を暴走させ、無尽蔵にしようしていた。

ただでさえ、今のアキラの魔力値は生きているのが奇跡的なほどに少なかった。その状態で魔力を使えば、今度こそ命に関わる。

彼女は、救援に駆けつけた兵にそう告げ、自身は再度アキラに向き直った。

アキラを死なせないためにも。生きさせるために。

だが、暴走しているアキラは思いのほか、強かった。

『近寄るな』

アキラが、彼女たちに理解できない言語で何かを告げると、彼女たちはアキラに近寄ることが叶わなくなる。

頭の中では近寄り、止めなくてはいけないと思うのに、体はそれに反して動かせなくなるのだ。

『氷の刃よ、近寄るものすべてに降りかかれ』

アキラが呟くと同時に、氷が刃の形を取り、兵士たちに襲い掛か

る。兵士たちは、自身の剣を使い、氷の刃を破壊するも、攻撃はそれで終わらないらしい。

『光よ、すべてを照らし、彼らから視界を奪い取れ』

『闇よ、すべてを覆い、彼らを闇へ誘いたまえ』

光と闇が、同時にアレグラと兵士たちを襲う。彼らは、全員揃って視界を奪われた。

今の彼らの瞳に写るものは、光の射さぬ、完全なる闇の世界である。しかも、その状態に陥る前に、一度光が目を射したことが、余計被害を甚大にさせた。

『風よ、酸素を奪い、彼らに未来永劫の眠りを』

アキラがそう呟いたのが、最後だった。

アレグラの目の前には、魔力の使いすぎで倒れ、意識不明の重体まで陥っているアキラがベッドに横たわっていた。

そのアレグラの手足には、真白い包帯が巻かれている。アキラを止めようとして、アキラの言の葉の力で結構大きな傷を負っていたらしい。

だが、それはアレグラのみではない。あの場に居合わせた兵は、誰もがひどいか軽いかの差はあれど、怪我を負っていた。

あの時、最後の言の葉を呟いたアキラは、魔力の使いすぎで、倒れた。そのおかげか、アレグラたちに襲い掛かっていた闇は消え去り、光が射した。

そのおかげで、彼女は光が戻った瞬間に、アキラを介抱に向かうことが出来たのだ。

あの後、アレグラは自分の傷の処置もそこそこに、アキラの処置に向かった。魔力の使いすぎで倒れたアキラ。放っておけば、魔力不足で、間違いなく死ぬだろう。

だから、彼女はアキラに魔力を注ぎ込んだ。自分の限界まで。

同僚たちが、アレグラの傷を見て、処置をし、その間の看病を代わると言い出すまで。

意識の無いアキラは、誰が触れても何の反応も見せない。ただただ、眠っていた。

その体からは、殆ど魔力を感じられず、はつきりと告げれば、死までのカウントダウンが始まっているような状態だった。

——だが、それはアキラが純粹にこの世界の人間であった場合だ。

アキラは、この世界の人間ではない。それが救いになっているのか、アキラは意識は無いながらも、何とか生き延びていた。

「アレグラ。彼女は、落ち着いていますか？」

「陛下。わざわざ足をお運びにならなくても、呼んでいただければすぐに参上いたしましたのに」

「かまいません。彼女の暴走で、あなたも怪我をしているのでしよう」

それから、アレグラは王に少しずつ話していく。アレグラの感じたアキラの境遇を。

自身の身を守るために、全力だったアキラの強さを。

そして、彼女に頼れる人を、無償の愛を注いでくれる「親」と言うものを与えてあげて欲しいと。

そうすれば、誰かが守ってくれると言う心が生まれる。人を信じられるようになる。ならば、魔力が暴走し、今回のように暴れることは無いだろう、と。

「ですから、よろしければ、我がクレメンス家で引き取らせていただけませんか？」

「兄君の説得はどうしますか？」

「私が出します。ただ、どうしても無理そうでしたら、陛下のお力を借りたく存じます」

そうして、突然妹からアキラを引き取りたいと告げられた兄、クレメンス侯爵ウェンリルは、突然の言葉に、目をまん丸にするも、快く受け入れた。

何せ、今のアキラは謀反人を退治し、国の危機を救った国の恩人と言う立場にある。

そんな人をクレメンス家の一員にすれば、クレメンスの名も上がるだろう。兄は、そう考えたのだ。

「ですが、お兄様。あの子は、アキラは、人を信じる事が出来ません」

その言葉に兄は停止するも、妹から、想像にすぎないが、アキラの境遇を聞いて、彼は、心からアキラを受け入れ、家族の一員とす

ることを決意したのだった。

何の冗談だ

突然、あなたは家の子になりました、なんて言われたら、普通引くよね。

しかも、それは意識の戻った直後。それがずっと意識不明で眠っていた（らしい）患者に対してすることですか。

それは、長き眠りから覚めた、数刻前に起こった出来事である。

目を覚ますと、そこは少し見慣れてきていた白の部屋ではなく、全く見覚えの無い部屋だった。ここは、何処だ。そう思いながら体を起こそうとするのだが、体は望みどおり動いてくれない。

それでも、無理やり体を動かす。——ベッドから落ちた。

「アキラっ!？」

ベッドから落ちた音に反応し、アレグラが急いで部屋の扉を開き、駆け寄ってくる。

そして、見事なまでに落下しているアキラを持ち上げ、ベッドに戻し、横にさせる。その後、厳しい目をして、アキラに告げる。

「アキラ。アナタの魔力は、今、生きるのにも足りないくらいしかありません。絶対に、無理をしないように。無理をすれば、今度こそ、命を落としてしまいますからね」

「……………分かった、無理する」

んで、死ぬ。表情を変えずにそう告げるアキラに、アレグラは溜

め息をつき、そして、その頭に鉄拳を落とした。

その後、涙目でアレグラを見つめるアキラに、はっきりと告げる。

「アキラ。僅か十歳くらいで、命を捨てないように。というか、医者である私の前で、命を軽んじる様な言葉は許しません」

「誰が十歳だ。私は十五。それに、この命は私のもの。自分のものを捨てようが、大切に使用が、全ては私の勝手だ。他人がとやかく口出しするな」

アキラが涙を拭い、いつものように冷たい瞳でそう告げると、アレグラはにっこりと微笑む。その笑みに嫌な予感を感じたアキラだった。

そして、その嫌な予感は、当たった。

「他人ではありませんよ。あなたは、陛下からの許可を得て、我が家の、クレメンス侯爵家の人間となりましたから」

「ふざけんな」

アレグラの言葉に、アキラは笑みを浮かべながら告げる。その目はいつものように全く笑っておらず、その目がアレグラに恐怖を与えた。

それに、アレグラはアキラが暴走したとき、アキラの強さを身を持って知っている。それ故に、アキラの今の笑みは、般若の如き恐ろしさを感じさせた。

「何を、勝手に、そんなことを決めてるんですか？ あなたは。あー、むかつく。死んできますから、外出させてもらえます？」

「いいいいえっ！ そんな軽く死んでくるだなんて言わないでくださいっ！」

それは、出かけたいから外に出させてくれと言っているような感じで、それが、本気だと言うことをよく知らせた。

だから、アレグラは止める。とにかく必死で止める。必死すぎるためか、アレグラは、アキラが今現在、自力ではまともに体を動かせないことを完全に失念していた。

「いいから、どけ。若しくは、消えろ」

「いえいえ。とりあえず、今はそれは置いておいて、診察はさせていただきますいね」

「触れるな触るな消えろ」

アキラはそう言って拒絶の言葉を出すのだが、抵抗のために自身で体を動かすことは出来ない。結果、アレグラはこれ幸いと診察を済ませていくのであった。

その間、アキラは剣呑な目つきでアレグラを見続けていたが、

そして、診察が終わる頃、今までずっと疑問に思っていたことを、ようやくアキラはアレグラに尋ねた。

「そいや、ここ、どこ？ こないだまでの部屋じゃないよね？」

「ああ、あの部屋はあなたのおかげで壊滅的被害を受けたので、移動させてもらいました。ここは王宮の客間ですよ」

「壊滅的被害？ 何で？」

アキラが問いかけると、アレグラは表情を歪ませた。あの惨劇を、覚えていないのかと。

覚えていないのも、身を守るための本能が働いたからだろう。そう考えながら、アレグラはゆっくりと説明を始めた。

「先日、あなたは魔力を暴走させ、病室を破壊しました。——全く

覚えていませんか？」

「知るか」

「そうでしょうね。あなたの目は、何も写していませんでしたし」

そのときのアキラの目は、冷たく、何の感情も写さず、ただただ、おのれに害を成すものに被害を与え続けた。

全ては、自らの手で自らの身を守るために。

「まあ、今は何も考えず、お休みなさい。近いうちに、侯爵である兄を連れて、挨拶に来ますから」

「来るな」

「いいえ、来ます」

アレグラはそう言っ、部屋を去る。最後に、「絶対に無理は禁止ですからね」と言い置いて。

実際は、そう言わずとも、今のアキラでは無理はおろか、自分の意思でベッドからおりることも、叶わない。

先ほど感じたアキラの恐怖に、そのことを完全に失念してしまったアレグラであった。

それから数日後。やっと、自分の意思で体を起こすことが出来るようになったアキラの元に、来客があった。

それは、アキラの義兄となるクレメンス侯爵ウェンリルと、この国の王子、王女たちだった。

「初めまして、アキラ・モガミ。私はクレメンス侯爵ウェンリル。アレグラの兄であり、君の義兄となる者だ」

「あー分かりました何も関係ない赤の他人さん。とりあえず、消えてください」

「赤の他人などではない。義兄だと言っているでしょう」
「知りません関係ありません。私に家族など存在しない」

二人は、一緒に訪れている王子と王女を完全に無視して話を進める。

「ええ、今まではそうだったんでしょう。ですが、今は私やアレグラがあなたの新たな家族なのです。さあ、兄と呼んで、私の胸に飛び込んでください」

「黙れ」

「遠慮はいりません。さあ」

「遠慮でもなんでもない。出て行け」

このバトルは、王子や王女には止めることができず、様子を見に来たアレグラが、兄の頭に鉄拳制裁を加えるまで、続けられたのであった。

お前は大嫌いだ

何なんだ、あの、義兄だとかのたまう馬鹿は。あれで侯爵？ 大丈夫か、この国は。

馬鹿な私でも、爵位の順番くらいは理解してる。確か、上から公爵・侯爵・伯爵・子爵・男爵だったはず。

つまり、あの義兄だとのたまう馬鹿は、この国で二番目に高い爵位を持っていることになる。

……早く、言の葉の力を使えるようにならないかな。そしたら、その力で日本に戻ってもう一度自殺するのに。

私が自ら刃を突きたてた胸の傷は、完全ではないが、大体癒えた。その辺は、アレグラの治癒魔法とか言うもののおかげだろう。そのおかげで、既に日常生活くらいならば、問題なくこなせる。

なのに、何故、まだベッドの上に縛り付けられていなければならぬ。

ちなみに、これは比喻ではない。実際に、魔術を使ってベッドに縛り付けられているのだ。

言の葉の力を使えるのなら、そんな魔術、破壊してやるのだが、今は何故か使えない。

アレグラ曰く、私の今の魔力値が最低値を下回っているからだろ

うとのこと。
と言うわけで、私はあの馬鹿の来訪を、自力で阻止することが出来ない。

——チッ。

「こんにちは、アキラ。今日こそ楽しくお話をしましょう」

「消える。二度と姿を現すな」

「そんなことを言わないでください、義妹いもうとよ」

「妹言うな。そして、消える」

この義兄だとのたまう馬鹿は、紹介を受けたあの日から、毎日のように顔を出しに来る。

何度、来るなど言ってもしつこくやって来る。

この、私を縛り付けている魔術が何とかなれば、逃げ出すのに。
だと言つのに、アレグラの診察と一緒に来るようになった魔術師は、絶対にこの魔術を解除しない。

畜生。この魔術を解きやがれ。逃げさせろ。

アキラが目を覚まして、数日の時が流れた。アレグラは毎日数度、アキラの様子を見に行き、その都度、魔術師に同伴してもらい、アキラが勝手に起き上がったたりしないよう、魔術をかけてもらっていた。

今のアキラに、無茶は絶対に禁物であるが故だ。

「バインド
《縛》」

魔術師は、今日もニコニコと微笑みながら、アキラに束縛魔法をかけていく。

そんな魔術師を睨み付けるアキラの目は、恐ろしい。

「アキラ、お願いですから、術を解こうなんて、しないでください
ね？」

「うるさいっ！ 解けっ！ もしくは、あの馬鹿何とかしろっ！！」

「あの馬鹿……？」

「妹なら、兄をしっかり制御しろ！」

あの馬鹿〓兄、クレメンス侯爵ウェンリル。ようやく、アレグラの脳内でその式が完成した。

そして、それを聞いたアレグラと、魔術師は吹き出す。そして、大爆笑した。

「何で、そんなに笑う！？」

「いえいえ。で、兄にどうしてもらいたいです？。」

「来るなって言え！ 迷惑だ！」

「来るなと言えはいんですね？ ですが、そろそろあなたの傷も癒えてきましたから、家に移ってもらいますよ？ そうすれば、自然と顔を合わせるようになりますが……」

アレグラが言った瞬間、アキラの表情はとても嫌そうなそれに変わった。そんなアキラに、アレグラは優しく微笑む。

「大丈夫ですよ。兄は優しいですから、きちんと言えば聞いてくれます」

「何回も言っただけど」

「もうしばらくの我慢ですね」

そうしていると、扉がノックされた。その瞬間、アキラは義兄が来たのかと、表情を歪ませる。

だが、来たのは義兄ではなく、王だった。

「お久しぶりですね、アキラ嬢。私はジェームズ・ジャン・アレグリス。気軽にジェームズと呼んで下さい」

「は？」

「おや？ 呼んでくだらないんですか？」

「知るか」

王に対しても不遜な態度を取るアキラ。その様子に、アレグラと同席していた魔術師が焦っていたことは、最早言うまでもない。

「ああ、かまいませんよ。私は異世界の方に畏まられたくはありませんから」

「——で、一体何の用ですか？ ジェームズさま？」

アキラの言い方に、敬いの気持ちは一切ない。

「くくつ。いやいや、こんな少女も楽しいですね」

王は、そんなアキラの様子を楽しんでいる。

まあ、アレグラと魔術師は始終焦りっぱなしだったが。

それが、王を迎えに来るものが訪れるまで、延々と続いた。

「いたーっ！ 陛下、まだ執務は終わっていません。戻りますよ」

「宰相補佐殿……。予想よりも早かったですね」

「ええ、探し回りましたよ。宰相殿もお怒りです。戻りましょう。」

——アレグラ殿、失礼いたします」

宰相補佐と呼ばれた男は、そう言って王の首根っこを掴み、引き摺りながら客間を去っていく。

アキラは、その様子を啞然とした顔で見つめていた。

「——アレグラ。王って、偉いんだよね？」

「もちろんでしょう。それがどうかしましたか？」

「王を引き摺ったりして、いいの？」

「あー、まあ、宰相様と宰相補佐様なら……」

アキラに問われたアレグラは、正直にそう答える。

宰相は、この国の筆頭公爵家当主であり、宰相補佐は、次点公爵家の跡取り息子である。

オマケで言うとしたら、現在の宰相は王妃の弟であり、宰相補佐の末の妹姫は、第一王子の婚約者だと影で噂されている。

影で噂されている理由は、本人《公爵家》が婚約者だと言うことを認めず、反対派の筆頭にいるからだ。

故に、正式に婚約者とは呼べず、ただただ、公爵家の末の姫君と呼ぶだけに終わっている。

但し、末の姫君は、滅多に外に出ることもなく、社交界に顔を出すことも殆どないが。

「まあ、いずれ、宰相様や宰相補佐様にも正式に挨拶に向かいましょう」

アレグラの言葉を、嫌そうな表情で聞き続けるアキラの姿が、そこにあった。

挨拶は面倒だ

私の傷が完全に癒え、アレグラ曰く、魔力も大分回復した頃、私は着たこともないようなドレスを着せられ、どこかへ向かっていた。その横には、義姉アレグラと、義兄ウェンリル。なんとなく、嫌な予感がするのは気のせいかな。

「陛下、クレメンス侯爵ウェンリル。妹たちを連れて参りました。入ってもよろしいでしょうか」
「どうぞ」

部屋の中からの声に、義兄は扉を開き、私やアレグラに先に入るよう促す。

そこには、この間みた王様と、その王様を連れに來た宰相補佐様、そして、もう一人。それが、恐らく宰相様だろう。

「陛下、宰相様、宰相補佐様。彼女が、新たにクレメンス侯爵家の一員となりました、アキラです。アキラ、お三方に挨拶を」
「アキラです」

面倒な。そう思いながら、一応、名前だけを告げる。

「アキラ、か。年は十、だったか？」

は？ 宰相らしき男の言葉に、私は目を見張らせる。そして、本当の年を言おうとした瞬間、アレグラに口を塞がれた。

そして、義兄がニコニコと微笑みながら「そうでございます」と言っている。ふざけんな、ど畜生。

「ああ、十歳と言うことは、家の末の妹姫と同じですね。今度、一緒に遊んであげてもらえますか？」

「よろこんで」

アレグラ、いい加減、私の口を塞ぐその手を離せ。愚兄、勝手に答えるな。

アキラは心の中で何度もそう訴えるのだが、口を塞がれている以上、それを口に出すことは出来ない。言の葉の力も使えない。

そして、王たちの部屋から離れ、アレグラがアキラの口元から手を離れた瞬間、アキラがキレた。

「誰が十歳だ、私は十五歳だ！　そして、愚兄！　勝手に決めるな！　私は行かないからね！！」

「落ち着いてください、アキラ。まず、年を誤魔化したのには、理由があります。あなたはどうか見ても、十五歳には見えません。それに、幼いほうが、この言動に関しても何も言われませんか」

「ふざけんな」

アレグラの言葉に、本気でキレたアキラだった。そして、実験を兼ねて、呟く。

『拘束しろ』

その瞬間、アレグラとウェンリルは、ゴムのようなものに縛られ、その場に倒れた。

そして、アキラは目を丸くしながら、己の手を開いたり握ったりしている。

「……使えるなあ」

そして、その瞬間、にやりとした笑みを浮かべる。アレグラとウエンリルは、嫌な予感がした。

「アキラ！ 止めなさい！」

「止めるんだ！ 無理はいけない！」

『日本へ、返せ』

それは、アキラが暴走したときに放った言葉。だが、今のアキラの切実な願い。

日本へ帰りたい。帰って、今度こそ死ななくては。

そう思いながら、アキラは言の葉に力を乗せ、呟いた。

だが、アキラは日本へは戻れていない。この国に縛られたままだ。このことが、言の葉の力にも限度があることを、アキラに知らせる。それが、面白くなかった。すべてを奪ってきた力が、すべてに及ばないと言ったことが。

オマケに、その使えない力を使うと同時に、アレグラとウエンリルは拘束から逃れたらしい。急いで、アキラを抑える。

「まだ、魔力を使うのは危ない。止めなさい、アキラ」

「その通りです。まだ、無理はいけません」

「——うるさい」

アキラが言うと同時に、ウエンリルは深い溜め息をつく。そして、呟いた。

「バインド
《縛》」

その瞬間、今までに何度もかけられた魔術が、アキラを襲う。
だが、アキラは一言でその魔術を破棄させた。

『破壊せよ』

たった、その一言でウェンリルの放った魔術は破壊される。――
そこには、勝ち誇った顔をしたアキラが立っていた。
だが、その数秒後に疲労でぶっ倒れた。

「無理のしすぎです。………歩けますか？」

「無理。だから、放つといて。死なせて」

「仕方がないですねえ。ほら、アキラ。負ぶさりなさい」

「いやだ消えろ」

辛そうにしているアキラに、義妹ウェンリルは優しく微笑みながら負ぶろうとするのだが、アキラは徹底的に阻止した。

ウェンリルが負ぶろうと手を伸ばすと、魔術を使って阻止してくる。――結果、アキラには限界が訪れた。

アキラは抵抗することも出来ず、ウェンリルの背中に負ぶられる。
その状態で、しばらくは剣呑な目つきをしていたアキラだったのが、それからしばらくすると、ウェンリルの体温が気持ちいいのか、背中の上で眠ってしまっていた。

その様子を、アレグラは優しく見守り、その寝顔を見れないウェンリルは悔しそうな顔をしていたが、それでも、自分の背中で眠れるほどに気を許してくれていることに、喜んでいた。

あれだけ拒否していても、それでも、ふれあった時間が長いから

か、無意識に、アキラはウェンリルとアレグラを受け入れていたのである。

二人は、そのことに喜びながら、城を出て、馬車の止まっている場所へ向かっていた。——突然、アキラが魔されるまでは。

「や……っだ……。やめ……。つかあさ……。痛い……………」

その声に気がついたアレグラが兄の背中で眠るアキラを見てみると、アキラの閉ざされたその目からは、涙が流れ落ちていた。

アキラの辛い記憶。両親に虐待を受け続けていたと言う、辛い過去。アキラは、それを今、夢で見ているのだ。

「……と……さん……もお……やめて……………よ……………」

アキラは、依然としてそう呟きながら、涙を流し続ける。

そして、そんなアキラのために急いで馬車へ戻ったウェンリルとアレグラは、魔され続けている義妹アキラを起こす。

「アキラ。アキラ、大丈夫だから。大丈夫だから、落ち着いて」

「誰も君を殴ったりしない。大丈夫だ」

二人がアキラの頭を撫でながら、優しくそう告げると、アキラは目に涙をためたまま、その冷たい瞳を開く。

その目は、涙でびっしょりで、睫毛も涙がつき、光を返していた。

「大丈夫。大丈夫だよ、アキラ。もう、誰もあなたを傷つけたりなんかしません」

アレグラが言うと同時に、アキラはアレグラの胸へ飛び込み、泣

きじやくる。今までずっと我慢をしていたのか、アキラの泣き声は、
叫び声は止まない。

何も考えず、ただただ、小さな子供のように、アキラは泣き疲れ
て再び寝入るまで、アレグラに抱きついたまま、泣き続けた。

覚えてないわ！

「いやあ、泣きじゃくるアキラは可愛かったですよ」

「嘘言うな！」

「嘘ではありませんよ、アキラ。ああ、どうせなら私に抱きついて泣いてくれればよかったのに」

「知らん！」

何の呪いだ。気がついたら馬車から下ろされ、クレメンス侯爵家だという屋敷の前に立たされていた。

そして、家に入ると、無駄に広い玄関が私たちを出迎え、そして、たくさんのメイドっぽい人や、執事っぽい人たちが、私たちを出迎える。

「お帰りなさいませ、旦那様、アレグラ様。そして、そちらが？」

「ああ。今日からこの侯爵家の一員となるアキラだ」

ウェンリルが言うと、執事やメイドが揃って頭を下げる。その中で、一人の執事と、一人のメイドだけが頭をあげた状態でアキラを見ていた。

「初めまして、アキラお嬢様。私はこの屋敷の執事長をしております、セイリアスと申します。気軽に、セルとお呼びくださいませ」
「初めまして。私はメイド長のクウィンセラ。気軽にクウィンって呼んでくださいませ」

その後、私はウェンリルやアレグラと共に、私の部屋だとか言う場所へ案内された。

その部屋は、クリーム色を基調にした色の壁に覆われていて、窓は大きく、そこからはのんびりと外が眺められそうだった。

ただ、悲しいことに、人が通り抜けられるほどには窓は開かないらしい。――飛び降りようと思ったのに。

そしてその後が、本気で悪夢の時間だ。

「そういえば、アキラ。あなた、どういう夢を見ていたんですか？」

「夢？ んなもん見てない」

夢か。思い出したくもない過去。両親に理不尽な暴力を受け続けた過去。

止めてと懇願しても、暴力の雨は止まなかった。いや、寧ろひどくなった。

だから、止めることを止めた。諦めることを覚えた。反論を返せば、暴力はひどくなる。

まあ、そうなる前に、口をガムテープで塞がれるようになったのだが。

とにかく、そんな過去をこいつらに教える必要はない。だから、私は誤魔化す手に出る。

「あんなに泣いていたのに、見ていないと言い張るんですか？」

――なんつった？

「私の胸に飛び込んできて、号泣したのに、覚えていないんですね」

――嘘だ。

私が、いくら我を失っていようと、人の胸に飛び込んでなくなん

て、醜態を晒していいはずがない。いや、認めない。
仮に、本当にそんな醜態を晒したというのならば、私が取るべき
方法は一つだけだ。

『現れる、剣。その名は草薙剣』
クサナギノツルギ

「ちよっ！ 何をするつもりですか！？」

「アキラ、その危ないものを私に寄越しなさい」

何をするつもり？ 決まってる。そんな醜態を晒したまま生きて
いくつもりなんてさらさら無い。だから、今度こそ自殺してやる。
そう思い、あの日と同じように心臓に刃を突きたてようとしたと
ころで、義兄に腕を止められた。——チッ。

「没収。アキラ、そう簡単に死を選ぼうとするな。命は、尊い」

「知るか」

「——アレグラ」

義兄がそう言ってアレグラを呼ぶと、アレグラは溜め息をつく。
そしてその直後、私の目の前は真っ暗になった。

「いくら何でも、この手は使わなくてもよかったですよ？
お兄様」

「そうしないと本気で刀を奪って、また死を選びそうだったんだ。
仕方ないだろう」

ウェンリルがアレグラに出した指示は、アキラを落とすこと。無
理やり意識を奪い、死から意識をそらせたのだ。

まあ、目を覚ましたら本気で怒ることは、必須だろうが。

そうしていると、アキラが、再び魘され始める。放つ言葉は、先ほどと同じだ。

「や……………あ……………。いたい……………よお……………、おかーさ……………」

アキラはそう言っで、今度は父にも止めるよう懇願するような寝言を呟く。そして、その目からは再び涙が流れ落ちていた。

この子は、どれだけ辛い人生を送ってきたのか。こんなに小さな子供が、ずっと親からの虐待を受けてきたのだ。辛かっただろう。悲しかっただろう。

だから、これからは自分たちが守っていかなくては。本気でそう考えるウェンリルとアレグラだった。

そして、その二人は揃って魘され続けるアキラを起こす。

「アキラ。アキラ。また、怖い夢を見たんですね。大丈夫ですよ」

起こされたアキラは、しばらくは呆然とした表情をしていたものの、しばらくすると完全に頭が覚醒し、自分が何をしていたのかはつきりしてきたらしい。

顔を真っ赤に染めたアキラは、毛布を頭までかぶって、隠れた。

「隠れなくてもいいんですよ、アキラ。怖かったんでしょう？　そういうときは、思い切り甘えてください」

「知らん！　寄るな！　触るな！　干渉するな！」

顔を真っ赤にしたままのアキラは、照れ隠しのためか、とにかく叫ぶ。叫んで、何とかその照れを隠していた。

そんなアキラに、アレグラとウェンリルは、真剣な表情で告げる。

「アキラ。君が、実のご両親にされてきたことを、教えてもらえないか？」

「言う必要はない」

「あるよ。私たちは家族になるんだよ？ 家族だからこそ、知っておきたい」

アレグラの言葉に、アキラは深い溜め息をつく。そして、「聞いても面白い話は何一つないよ」と前置きを一つして、ゆっくりと話し始めた。

家の両親は、はっきり言うと、完璧主義者だった。そんな二人である私も、完璧であることが求められた。だけど、私は完璧でないことなど問題にならないようなものがあつた。

それが、この異端の力。——言葉を実現化する、言の葉の力。

小さい頃は、完璧にするために検査をして、治せるのならば治そうと尽力していたみたいだけど、治らないことが分かれると、私はあの二人の子供じゃなくなつた。

話しかけても無視されるか、殴られるようになった。そして、近所の子で何かほめられるようなことが会ったときは、「お前のせいで、私たちは日向を堂々と歩けない」とか何とか言って、私を殴り、蹴られてきた。

止めてもらおうにも、何を言っても無駄だった。口答えすると、余計ひどくなつた。

それに、途中からは私に力を使わせないために、両親が暴力を振

るうときは、絶対にガムテープを使って口を塞ぐようになった。

だから、自殺と言う方法を選んだ。遺書に、今まで両親にされてきたことをしっかりと書き連ねて、その遺書の目の前で、刃で心臓を貫き、死ぬはずだった。

私は、私の死と言う手段を以って、社会的に完全に抹殺するつもりだった。

あの世界には、メディアと言う、国の情報を国中に伝える手段がある。私の自殺方法なら、間違いなくニュースになるだろう。そうすれば、あの両親は間違いなく、メディアに叩かれる。

それで、いいはずだった。

ねえ、私は、どうして召喚なんてされたのかな？

聞いたのはお前らだ

ねえ、聞きたいと言ったのはそっちだったはずだけど、どうしてそんなに止まってるのかな？ 私は話を一度停止させ、義兄と義姉に尋ねる。

だが、返事は返ってこない。二人ともまだ停止していた。いつになつたら元に戻るのだろう。

そう思いながら、かなりの時間が経った。二人は、依然として停止したままだ。

「ねむ……………」

アキラはそう言いながらあくびをひとつする。本気で退屈なようだ。

そして、それからさらに時間が流れた。アキラは、退屈の限度が超えたらしく、とつくに夢の世界の住民と化している。

それに気がついたメイドは、アキラを起こさないよう静かに毛布をかけ、風邪を引かないようにする。

まあ、仮に風邪を引いたとしても、アレグラが医者であるため、問題は無いのだが。

そうしてアキラが夢の世界の住民と化して少しすると、ようやく停止していたアレグラが行動を開始する。

彼女は、兄をどんな手段を使ってもかまわないのか、とにかく元に戻す。叩き、頭に一撃入れ、その他もろもろ、いろいろと試し

ても元に戻らない兄に、アレグラは辟易する。
結果、最後の手段に出ることに舌らしい。

アレグラは、執事やメイドの手を借りて、兄を風呂場へといざなう。そして、風呂場に着いたかと思うと、座らせ、頭から冷水をかけたのである。

「わっ！ つめたっ！」

冷水をかけられたウェンリルは、一気に正気に戻った。

「何をするんだ、アレグラ！」

「お兄様が中々元に戻らないからでしょう」

「だからって、いきなり冷水は無いだろう。心臓が止まるかと思っただぞ」

「そうになったら、私が蘇生させてあげますから大丈夫ですよ」

アレグラとウェンリルの二人で、怖い会話が展開される。まあ、会話と言うよりは、アレグラの言った言葉が一方的に危ないのがあるが。

そして、そんな兄妹を、執事とメイドは微笑ましげに眺めていたそう。

「……そういえば、アキラはどうした？」

「……えーっと……」

「アキラお嬢様でしたら、先ほどのお部屋で休まれています。お風邪を召されないよう、毛布をかけてありますので、ご安心くださいませ」

執事やメイドが、主兄妹の会話に口を挟み答えると、二人はホッ

とした表情を見せる。そして、二人揃ってその部屋へ戻るのであった。

そしてそこには、椅子に座ったままで気持ちよさそうに眠るアキラの姿があったそう。

そんなアキラに、アレグラがそつと手を伸ばす。——その瞬間、アキラの瞳は開かれた。それと同時にアレグラの手も弾かれる。

「……………寝てるときに触るな。心臓に悪い」

「すみません。ですが、アキラ。椅子の上で眠るのは、体が痛くなるでしょう？ 休むのなら、自分の部屋のベッドで休みなさい」

「ん……………疲れた」

反射的に目を覚ましたアキラだったが、まだ眠たかったらしく、アレグラの指示に素直に従い自分に与えられた部屋へと向かう。

そんなアキラを黙って見送ったアレグラとウェンリル——という風にはならなかった。二人は、小鴨よろしくアキラの後についていく。

「ついてくるな。——ウザイ」

後ろについているふたつの気配に、アキラは振り向くことすらせずに告げるのだが、小鴨は親鴨の後ろをついていくように、離れない。

最後は、アキラが言の葉の力を使って部屋に転移し、誰も入って来れないように鍵をかけることになったそう。

そしてアキラは、誰も進入してこないと言う安心感の元、気持ちよく、再びの眠りに着いたそう。

それからしばらくして、目を覚ましたアキラが水を飲もうと部屋の扉の鍵を解き、扉を開くと、そこには部屋に入ろうと足掻き、疲れ果てて座り込んでいるウェンリルとアレグラがいた。

「何してんの？」

アキラが静かに問いかけると、アキラの部屋の扉がようやく開いたことに喜ぶウェンリルとアレグラは、まず、アキラを抱きしめた。

「なっ……、離せっ！」

「嫌です。せつかくですから存分に抱きしめます」

「私もです。アキラってば、転移して、扉に鍵をかけるんですもの」

ウェンリルやアレグラは、アキラの言葉にそう返す。アキラは、それにいらつと来たらしい。静かに、言の葉を紡いだ。

『離れろ』

その瞬間、ウェンリルとアレグラの体は、彼ら自身の命を聞かず、アキラから離れる。

「ちよっ！ アキラ、何をするんですか」

「言の葉を紡いだけ。寄るなど言っているのに寄って来るからだ」

だからって、そこまですることはないじゃないですか。ウェンリルやアレグラが言っていると、アキラは更に言の葉を紡いだ。

『黙れ』

「ん——っ！」

「んんう——っ！」

アキラの言の葉の力を受けた二人は、「ん」以外の音を出すことが叶わず、とにかく唯一発する言葉の出来る音を繰り返す。

そんな二人の様子を、アキラは冷めた目で見つめる。——そして無言で自分の部屋へと戻っていった。

もちろん、自分の部屋へ戻ったアキラは、二人を冷めた目で見つめたまま、部屋に鍵をかけた。

無常にも、ウェンリルとアレグラの目の前で、アキラの部屋の扉は閉ざされる。

「あの二人、大人として大丈夫なのか？」

部屋に戻ったアキラは、言の葉の力を使って水を出し、それを飲みながら静かに呟く。

アキラのかかったウェンリルとアレグラに関しては、アキラの言っていることが的を射ていたりするのは、余談となる。

そして、アキラの言の葉の力の効力が尽きた瞬間、二人はアキラの部屋の扉を開こうと足掻いたこともまた、余談である。

公爵家へ行こう（前書き）

あはははは。 やっちゃった。

掴んだ新たな希望とドッキング。

こちらはアキラ主体のお話、

あちらはアリサ主体のお話。

よろしければあちらもお楽しみくださいませ。

同日同時刻に更新していきますので♪

公爵家へ行こう

ああ、面倒くさい。心の底から面倒くさい。何故、こんなことになったのか。

今、アキラは馬車に乗っていた。行き先は、公爵家。曰く、アレグラが主治医を務める公爵家のオジョーサマが体調を崩したらしい。で、何で私まで行かなくちゃいけないわけ？ アキラはアレグラに尋ねる。

「アリサお嬢様は、アキラに会うのを楽しみにしていたんですよ。だからです」

「理由になつてねえ」

「立派な理由じゃないですか。——それに、アリサお嬢様は、病弱ゆえにお友達がいません。だから、アキラにはアリサお嬢様のお友達になつてもらいたいのですよ」

アレグラが言うと、馬車は公爵家に到着したらしく、従者が馬車を止め、到着を知らせにやって来た。

そして、馬車から降りたアレグラとアキラは、公爵家のメイドに先導され、屋敷内へと足を踏み入れる。

「ああ、今日はわがままを言つてごめんなさいね、アレグラ」

「いいえ、お気になさらず。それに、お嬢様の今回の発熱の原因には、このこともあるのでしょうか？」

屋敷に入るとすぐに、この屋敷の人間、公爵夫人がアキラのほうを見ながらアレグラに話しかける。

一体何なんだ。アキラはそう思っている、口には出さない。表

情にも出さない。その瞳からは、何も伺えない。

公爵夫人はそんなアキラをよく分らないものを見るような瞳で見つめるのだが、すぐにその目は消える。そして、アレグラとアキラを彼女の最愛の娘の部屋へ誘った。

「アリサ。アレグラが来たから起きて」

「……………眠い……………」

「起きなさい」

公爵夫人は、眠っている娘を容赦なく起こす。その様子を、アレグラは微笑みながら、アキラは無表情のままで見つめていた。そして、アリサが目を覚ますと、アレグラが仕事にかかる。

「お嬢様。今日は、どんな調子ですか？」

「熱い。だるい。何もしたくない。ところで、後ろの子が……………」

何もしたくないと言うわりに、熱を出したと言う公爵家のオジヨ―サマは、アレグラの後ろにいるアキラに興味津々の様子である。だが、そんなアリサを、アレグラはにっこりと微笑み、黙らせた。

「それは診察が終わってからにしましょう。さ、胸を出してください
い」

「はあい」

それから、アリサは素直にアレグラの指示に従う。そうして順調に診察は進んでいった。

「はい、いいですよ。では、いつものように薬を出しておきますから、きちんと飲んでくださいね？ 飲まなかったらいつまでも熱は下がりませんからね」

「分かってますー。で、後ろの子は？」

その後、アレグラがにつこりと微笑みながら告げると、アリサは目を輝かせ、アキラに興味を向ける。

そんなアリサの様子に、アレグラはほほ見ながら、アキラをそばに呼び、アリサに紹介をした。

「この子は先日よりうちの家族になった、アキラです。アキラ・モガミ・クレメンス。年は同じですね。アキラ、自己紹介を」
「アキラ。よろしく」

アキラは無表情で端的に名前だけを告げる。だが、熱に魘されているはずのアリサは、微笑みながらアキラに挨拶を返した。

「初めまして、アキラ。私はアリサ・クライシス・ドーリス。横になったままの紹介で悪いけれど、調子が悪いから容赦して欲しいな」
「気にしてない」

「ありがと。で、年、同じなんだよね？ 私、今まで年が同じ友達っていなかったから、仲良くして欲しい」

嫌だ。アキラがそう言葉を紡ごうとした瞬間、アレグラがアキラの口を塞ぐ。そして、代わりにアリサに返事を返した。

「もちろんです。私からもお願いします。仲良くしてあげてください」
「うん。ありがとう、アレグラ。よろしくね、アキラちゃん。私のことはアキラって呼んでね」

アレグラが代わりに答えると、アリサは嬉しそうに微笑む。病弱故に同年代の友達を作れなかった少女。そして、愛を知らない少女。

二人はいい友達になれるだろう、アレグラはそう考える。

ただ、アキラは面白くなさそうな顔をしているが。

結果、アレグラは早くアリサを休ませることにしたらしい。優しくアリサに告げる。

「さあ、そろそろお休みください。元気になりましたら、またアキラを連れて遊びに来させていただきますから」

「ホント！？ 約束だよ、アレグラ」

アレグラの言葉にアリサは目を輝かせる。反対に、アキラの目は冷たいままだ。それが、アレグラを若干焦らせた。

アレグラは焦りながらも診察に使った道具類を片付けていく。

その後、アキラを捕まえて、アリサに一言声をかけてアリサの部屋を出て行った。

「奥様、今回の薬です。きちんと飲ませてくださいね」

「分かってるわ。ありがとう、アレグラ。本当に、わがママを言うて悪かったわね」

「お気になさらないください。では、失礼いたします」

こうして帰途に着くまでの、馬車の中がアキラの怒る場所となる。

「さて、アレグラ。何、勝手に答えてくれてんのか、話してもらえる？」

人の考え無視して勝手に答えるなんて、普通しないよねーえ？
アキラが冷たい目のままで問いかけると、アレグラは若干逃げる。

だが、馬車の中では然程逃げることは出来ない。結果、アレグラは容易にアキラに捕まることになった。

「ねーえ、答えてよ、アレグラ?」

「あ、ははは。怖い、怖いですよ、アキラ」
「うん、故意だから」

アレグラの言葉に、にっこりと作り笑いを浮かべて答えるアキラ。
それが、更なる恐怖を呼び込んだ。

「ねえ、何を考えて、勝手に答えてるの? 教えてくれるかな、お姉ちゃん?」

威圧と尋問

「ねえ、何を考えて、どうして勝手に答えるのか教えてくれるよね？ お姉ちゃん」

アキラは後ろずさりつつある姉に、^{アレグラ}にっこりと微笑みながら、それと威圧感を感じさせながら告げる。

「こ、怖い。怖いですよっ！ アキラ」

「怖い？ 何言ってるのかなあ、このお姉ちゃんは。妹を怖いって言っなんて、どこの悪魔？」

アキラの微笑みは消えない。それだというのに、アキラの威圧感
は消えることを知らず、寧ろ強くなってきた。

その威圧感が、さらにアレグラを怯えさせた。本気のアキラの強さをよく知っているアレグラ。それでこそこの怯え方なのである。

「ねーえ、お姉ちゃん？」

「い、いえ、その、アリサお嬢様のためと言うか何と言うか……」
「どういうことかな？」

^{アレグラ}姉の言葉に、アキラは微笑みの表情を消すことなく問いかける。

「お嬢様は、精神状態が体調に反映されやすいんです。これで断つていれば、お嬢様は恐らく沈み込み、体調を悪化させていたでしょう」

お嬢様は、体がお弱い。そして、その体調はしっかりと気遣っておかなくては、下手をすれば命にも関わります。それを避けるため

にも、お嬢様を沈み込ませないため、アキラの意思に反してでもお嬢様を悲しませないようすべきでした。

アレグラは下を向きながら、怯え腰ながらも回答を返す。

「は？」

「ですから、お嬢様を生かすためですよ。私は医師として、誰にも死なれたくありませんから」

「その結果が、私の意思を無視したわけか」

「無視した点は、謝罪します。申し訳ございません。ですが、お願いですので近いうちにお嬢様にもう一度お会いしてさしあげて下さい」

そう言うアレグラの目はまっすぐだった。患者を生かしたいと言う確固な意思。迷いなどないと告げる、その瞳。

それが、アキラを屈服させた。アキラは小さな声で「分かった」と答えを返す。

「ありがとうございます、アキラ」

「……でも、次勝手に答えたら、そのときはどうなるか覚悟はしておいてもらっよ」

アキラはそう言うと同時に、一度消し去っていた威圧感を再び漂わせる。仮に次があったときは、そのときは容赦はしないとアキラは目で語る。

そして、アキラはもしそのときがあったときはどうしようかと、威圧感を漂わせながらものんびりと考えていた。

大概のことは、言の葉の力を以ってすれば為しえることが出来る。それゆえに、アキラはいろいろなことを考えていた。

——それこそまさに、拷問まがいのことをいろいろと考え込

んでいた。

そのときのアキラの表情は紛れもなく満面の笑顔で、その笑顔がアレグラに更に恐怖を感じさせることになった。

「あ、アキラ？ 一体何を考えているんですか、あなたは」

「ん？ ああ、ごめん、トリップしてた。……次があつたときに何をしようか考えてただけだよ」

「……とりつぶ？ 何ですか、その言葉は。アキラのいた世界の言葉ですか？」

「んー、いや、トリップは英語だから違うねえ。私たちの母国語は日本語だから」

アキラ、あなたは本気で恐ろしい子ですね。この日、アレグラは本気でそう考えたと言っ。

何かあつたときのため、身を守る方法等をしっかりと考えているアキラ。それは最早拷問まがいと言っか、日本でこの方法を使つたら間違いなく過剰防衛で逮捕されるような方法だつた。

——というか、この国でその方法を使つても、下手をすれば兵に切り殺されても文句は言えないような内容だつた。

後にこの話を聞いたアレグラと兄、ウェンリルは本気でアキラの行く末を心配したそうだ。

——この子の行く先に幸せが溢れていますように。
アキラ

アレグラとウェンリルは、真剣に神に祈りを捧げ、アキラのために祈りを捧げ続けた。

いつまでも、いつまでも。アキラが幸せに過ごせるように、愛を知ることが出来るように。

アキラが、未来永劫愛に包まれた生活を送ることが出来ますよう

に
と。

見抜かれた記憶

アキラが公爵家を訪れて数日後、アリサの熱が下がり、アキラたちは公爵家に招待されていた。

「お招きに預かりまして、クライシス侯爵妹、アレグラとアキラ、貴家を訪問させていただきました」

「そんな堅苦しい挨拶は止めてちょうだい、アレグラ。今回は家が呼んだんだから」

公爵夫人は、そう告げながら近くにいるアリサを見る。それだけで、今回の招待はアリサが望んだことだと言うことがよく分かる。そしてその後、公爵夫人はアリサを見、優しくアリサにこう告げた。

「アリサ。アキラ嬢と、アリサのお部屋で遊んでなさい」

「うん！ 行こう、アキラちゃん」

公爵夫人の言葉を聞いたアリサは、嬉し^母そうに微笑みながらアキラの手を取る。そして、目を輝かせてアキラを自身の部屋へといざなうて行った。

「アリサ、無理はしないようにねー」

「うん！ 分かってるよー」

答えを返すアリサのその声は、喜びを感じさせていた。

そして、アリサの部屋につくと、アリサはすぐに爆弾を落下させた。それは、巨大な爆弾。少なくともアキラにとってはとてもダメ

ージの大きい、ありえない爆弾だった。

「アキラちゃん、日本って言う国、知らない？」

何故、ここでその名前が出てくる。アキラは目を見張らせながら考える。その考えに嵌まり込んでいるがゆえか、今のアキラに答えを返す余裕などどこにもなかった。

だが、アリサはアキラのその表情でアキラが返そうとした答えが分かったのだろう。淡く微笑みながら、紙と書くものを取り出し、その紙に何かを書き込んでいた。

「なら、モガミって言う漢字はこう書くのかな？」

その紙に書かれていた文字は、最上。それは、正真正銘アキラの日本で使っていた苗字。自分で書いたりしない限り、二度と見ることはないだろうと思っていた文字。

信じられない。こいつは、何者だ。そんな意味を込めてアキラはアリサを睨み付けた。

「何故、それを知ってる」

「……私が、前世の記憶を持った転生者だから。——私はね、元日本人なんだよ」

それからアリサは、ゆっくりとアキラに説明をしていく。日本で事故に遭って死んだこと、それで転生を果たし、こうして生きていることを。

そして、説明を終えたアリサは、まっすぐにアキラを見る。そして、静かに口を開いた。

「ねえ、アキラちゃん。本当の年齢はいくつなの？ 日本では十歳

は、こんなに大人びてないでしょう？ 本当は何歳なの？」

「――っ」

分かってくれる人がいる。私を年相応に見てくれる人がいる。その事実が、アキラを喜ばせた。そして、無意識に涙が流れた。

嬉しい。その気持ちが、アキラの体を駆け巡る。その気持ちが涙に変わり、次々に流れ落ちていく。

そのことで、アリサが焦っていたことは、最早言うまでもない。

「あ、アキラちゃん？ どうしたの、大丈夫？ えっと、一応ごめん？」

アリサはそんなアキラに、おろおろとしながら一応謝罪の言葉を発し、そして同様に涙を拭くようタオルを差し出した。

タオルを受け取ったアキラは、礼を言うこともなく、ただただ静かに頬を伝い落ちる涙を拭いとる。その後、ゆっくりと口を開いた。

「謝らなくていい。寧ろ、突然泣いた私が悪い。で、どうして分かった？」

アキラが問いかけると、アリサは淡く微笑む。それは今のその体の年に似合わない微笑みだった。

「言ったでしょ？ 私は、元は日本人だよ？ 同胞の年くらいは大体予想はつくよ」

「なら、いくつくらいに見える？」

「んー、私の死んだときと近い感じ出し、大体十四・五つてところ？」

「あたり。本当は十五歳だよ」

そこまで分かってくれる。アキラはそれが嬉しかった。同じ（元）日本人ならば、自分のことを分かってくれるかもしれない。そう考えたのだ。

そう考えていると、突如アリスがアキラの手を握る。アキラは咄嗟にその手を離そうとしたのだが、アリスは離さなかった。

「離れろ！ 離せ！」

「……………ねえ、アキラちゃん。日本で何があったの？ 私が死んだ後に、日本は何か変わったの？ 特に、子供に対する周りの接し方とか、変わっちゃったの？」

その質問を放つアリスの表情は悲しそうで、それを聞かされたアキラの表情も、はつきりとは分からないが悲しそうだった。

どうして、分かるのだろう。実は、日本で知り合いだったとか、そう言う可能性があるのだろうか。アキラはその悲しそうな表情のしたでそう考える。

だが、もちろんアリスはアキラの境遇など知らない。アキラの反応見て予想をしていただけだ。

「本当に、何があったのさ」

アリスはそう告げながら、優しくアリスを抱きしめた。

「は……………なせっ！」

アキラはそう言いながらも、抵抗はしていない。それは、アキラがアリスを受け入れ始めているいい証拠だった。

そして、受け入れたがためか、分かってくれる人がいて安心できたのか、アキラは泣き始めた。アリスの胸の中で、思い切り泣き出したのだ。

そんなアキラをアリサは優しく見守る。アキラが泣きつかれて寝入るまで、ずっと見守り続けていた。

こうしてアキラとアリサのふれあいは終わりを告げる。
与えられた安心。それが、アキラの心の氷をほんの僅かではあるが溶かした。

ドーリス公爵家末子、アリサ。彼女はこの日、アキラの中で本当の自分を分かってくれる存在一位に君臨したと言う。

兄と姉（前書き）

久しぶりの更新です。

すみません、相当時間が空きましたね。

こっちは中々考え付かないんですよ。

ですので、次の更新もおそらく、しばらく先だと思います。

兄と姉

……あれ？　これ、何の尋問？

公爵家を訪問したこの日、クレメンス侯爵家に帰って来たアキラは、兄・ウェンリルと、姉・アレグラを前に、尋問もどきを受けていた。

「アキラ、アリサお嬢様と一体何を話したんです？」

「お嬢様に何か嫌なことを言われて泣いたんですか？　嘘はつかないでくださいね」

いやいや、本当にこれ、何の尋問だよ。アキラは逃げるための言の葉を紡ぐ用意をしながら、のんびりとそう考える。

これを尋問と言わずして何と況や^{いわん}。そう考えながらも、静かに準備していた言の葉を呟いた。

レポート
『転移』

「ちよっ！　待ちなさい、アキラ！」

そう言われて待つ馬鹿はいないだろう。アキラはそう考えながら自室へと転移し、そして、その言の葉の力を持って他者の侵入を拒んだ。

『完全封鎖』

その一言で、誰もアキラの部屋には入って来れない。入ることは叶わない。それがアキラの言の葉の力。

その部屋の中で、アキラは静かに目を瞑った。思い出すのは、公爵家の末子、アリサとの会話、というか一方的に告げられた言葉。

”私はね、元日本人なんだよ”

”本当は、何歳なの？”

”本当に、何があつたのさ”

この世界で、アキラを除いて唯一日本と言う国を知っている少女。日本と言う国がどんなものなのか、よく知っている少女。

だから、彼女はアキラを心配した。自分の死んだ後の日本を気にかけた。

彼女は、アキラが日本で虐待を受けていたことを、何となく察していた。その上で、アキラを愛そうとした。

だから、アリサはアキラを優しく抱きしめていたのだ。

「変わったヤツ……………」

アキラはアリサをそう評する。だが、その言葉に悪意は一切なく、ただただ、純粹にアリサが変わっていると思っただけだった。

何せ、今のアキラ内ランキングは、ウエンリル アレグラ義兄や義姉よりも上にアリサがいるのだから。

「アキラ！ 開けてください、アキラ！」

「煩いな……………」

『音声遮断』

そうして、外からの音を完全に遮断し、自分の世界に入り込んだアキラは、真剣に思案する。アリサのいつていた言葉を。転生者だという、その言葉を。

何となくではあるが、アキラの置かれていた境遇に気がついているアリサ。気がついて、それでも深く追求せずに優しく受け入れた

少女。

「……………なんで、あんな簡単に人を受け入れることが出来るんだろ」

アキラには分からないことばかりだった。人を受け入れることが出来ない少女。人を信じる事が出来ない少女。

だから、アキラにはアリスの思考が分からなかった。どうすれば人を信じる事が出来るのか。

ちなみに、この間も扉の外では扉を開いてもらおうと、アレグラやウエンリルは声をかけ続けている。

「アキラ！　開けてください！」

「扉を開くんだ！」

だがもちろん、言の葉で音声を遮断したアキラの耳に、その言葉は届かない。

結果、音声遮断の切れたアキラの耳には、一気に兄や姉たちの言葉が入り込んだ。

「アキラ！　開けてください！！」

「……………うっさいよ」

「アキラ！」

その兄たちの声に辟易したアキラは、静かに扉に近寄り、声をかけた。もちろん扉は開かない。開いたらその瞬間に二人が部屋に飛び込んでくることを予想しているからだ。

「うるさいよ、二人とも」

「アキラが扉を開いてくれれば、静かになりますから」

「アレグラの言うとおりだよ。アキラ、扉を開いてくれるかな？」
「やだ。用件あるなら、そこで言ってもよ」

正直、顔合わせて話すの面倒なんだ。アキラはそう言いながら、扉に背を向け、座り込む。

その瞬間、パシッという乾いた音があたりに響いた。

「ちっ！ もう切れたのか」

『完全』

完全封鎖という言葉の完全までしか言うことが出来なかった。アキラの呟きを聞いた二人が、外側から扉を開いたのだ。

結果、扉にもたれかかっていたアキラは、後ろに倒れることとなる。ゴンツと言う、アキラが床に頭をぶつける音が、嫌なくらいによく聞こえた。

「あ！ すまない、アキラ。大丈夫かい？」

「動かないでくださいね、アキラ」

アレグラはそう言って、ぶつけた頭に意識を集中させているアキラの頭を診る。

「—— 触るなっ！」

「ダメですよ、アキラ。きちんと処置をしないと、腫れてきますからね」

「なら、氷をくれればいい！ 触るな！」

「氷よりも、治癒魔術のほう効きますし、早く痛みも取れますからね」

アレグラが何度言っても、アキラは触るなという言葉しか放たな

い。だが、アレグラは諦めなかった。

「お兄様、アキラを押さえてもらえますか？ その間に診ますから」

「分かった。アキラ、しばらく大人しくしていてくれよ」

「てめえ！ 離せ！」

「女の子がそんな言葉を使っではいけないよ。ほら、大人しくしよ
うねー」

妹に頼まれた兄は、そう言いながらアキラを羽交い絞めにする。
それにアキラは文句を連ねるのだが、それでもウエンリルは堪えな
いらしい。

「いいから大人しくしなさい。治療は早く済ませたほうがいい」

ちなみに、よっぱど離れたいのならば言の葉の力を使って離れれ
ばいいのだが、頭の痛さでその考えが浮かばないらしい。

結果、アキラは望まずとも、治療を受けさせられること隣、だが
そのおかげで痛みの大体は吹っ飛んでいくこととなった。

「はい、もういいですよ。お兄様、ありがとうございます。アキラ、
後は氷を用意させますから冷やしておいて下さいね」

じゃないと、後から腫れて痛い目を見ますからね。アレグラの言
葉に、もう諦めたらしいアキラは静かに頷いた。

その後、メイドから氷の入った袋を受け取ったアキラは、アレグ
ラの指示に従って、ぶつけた頭に氷を当てる。

「あー、気持ちいいー」

「ぶつけた場所が、今熱を持っていますからね。しばらく、冷やし

続けているんですよ」

「ん」

そうしてアキラは大人しくぶつけた頭を冷やし続ける。自分の気が済むまで、痛みが完全に取れるまでしばらくの間――。

信じるということ

「アキラ、今日は僕とアレグラとアキラでお出かけだよ。用意をしておいで」

「……………あ？」

いきなり何言ってるの、あんた。アキラはそう言う目でその言葉を告げた兄を見る。その目はとても冷たく、慣れていない者が見れば踵を返したくなるようなものだったが、ウェンリルは一切気にしなかった。にこにこ微笑みながらアキラを見続けている。

結果、負けたのはアキラだった。アキラは溜め息をついて、ウェンリルに問いかける。

「出かけるって、どこにさ？」

「街の外だよ。街の外に景色のいい、きれいな場所があるんだ」

そこで、日ごろの疲れを癒そうと思ってね。それに、あの景色は本当にきれいだから、アキラにも見せたかったんだよ。

ウェンリルはそう言いながら、アキラの頭を撫でようと手を伸ばすが、それはアキラが拒否した。反射的に自らの手で伸ばされたウェンリルの手を弾く。

「大丈夫、怖くないから。少しずつ慣れておくれ？」

「……………無理だろ」

アキラはそう言ってお出かけの用意をするために部屋へと戻っていく。なんだかんだ言ってもお出かけ自体は楽しみたい。

——アキラ自身は楽しみにしている自覚は無かったのだが、用意に向かうアキラを見ているウェンリルはアキラが楽しみにしてい

ることに気がついたらしい。淡く微笑んでいた。

「さて、僕も用意をしなくては。アレグラも用意してるだろうし」

そうしてウェンリルも用意のためにテクテクと部屋に足を向ける。アキラが楽しそうにしていることに心から微笑みながら、用意をしていた。

「さあ、行こうか、アレグラ、アキラ」

「ええ。アキラ、これから馬車でお出かけです。——楽しみですか？」

「——！ べ、別にっ！」

本当に楽しみなんですね、アキラ。アキラの答えを聞いたウェンリルとアレグラは、揃ってそんなことを考える。

そして、アキラの隙について、アキラの頭を撫でた。

「っ！ 触るな、離せ！」

「イヤだね。こんなに可愛いアキラを可愛がらずしてどうしろと！？」

「お兄様の言うとおりですよ」

いいから離せーっ！ アキラは必死で逃れようとしているのだが、大人二人からは逃れられなかった。アキラはしばらく頭を撫でられ続ける。

というか、よっぽど逃げたいのならば言の葉の力を使えばいいだろうに、アキラは使わない。

そのことは、ウェンリルとアレグラも気がついていた。逃れようと思えば簡単に逃れられるのに、そのための力をアキラは使わない。

それ即ち、少しずつ、本当に少しずつではあるが、自分たちを信用してくれていると二人は考えているのだ。

事実、アキラはほんの少しではあるが、この二人を信用し始めていた。それでも、ドーリス公爵家末子ほど信用されてはいないのだが、それでも信用され始めていたのだ。

「さ、馬車に乗ろうか。機嫌を直してくれ、アキラ」
「ほら、行こう？」

そうしてアキラは二人に連れられて、馬車に乗り込む。そして、三人が馬車に乗り込み、席に着くと同時に馬車は動き始めた。

「これから行く先を軽く説明しておこうかな。今から僕たちは、街を出て、街のすぐそばの森に入る。その森の中で、きれいな泉があるんだ。僕たちの目的地はそこだよ」

ウェンリルが言うと、アキラは瞬間的に目を輝かせる。が、その様子をウェンリルとアレグラが微笑ましげに眺めていることに気がついたらしく、咄嗟に顔を逸らした。だが、その顔は赤い。

「あははっ、アキラは可愛いね。楽しみのようで、計画を立てた甲斐があるというものだよ」

「う、うるさいっ！」

「照れなくていいんだよ、アキラ。ほら、楽しみだって言うてみ？ そしたら、またお出かけの計画を練るよ」

「う…………、ど、どうでもいいもん…………」

「おや。じゃあ、今日は帰ろうか。せっかくここまで来たけど、アキラが楽しみじゃないのなら——」

ウェンリルはニヤニヤと笑いながらそう告げる。その瞬間、アキラが一瞬たじろいだ。

「アキラが楽しみだというのなら、そのままお出かけだが、楽しみじゃないなら帰るよ。さ、どうする？」

アキラが一言楽しみだといえば、お出かけは続行される。だが、楽しみじゃないのならば、そのお出かけは中断されるのだ。結果、負けたのはアキラだった。

「た、楽しみだから、そのまま——お出かけ、して……」

「もちろん！ 次のお出かけの予定も練らなくてはいけない……。アキラ、次はどこに行きたい？」

「どこって言われて、分かるわけ、ないじゃん……」

アキラは顔を真っ赤にしながらいい、アレグラはそんな兄と義妹の様子を微笑ましげに眺めていた。

——止めるよ。この日アキラは、真剣にそう考えていたという。

そうして馬車はしばらく走り続け、目的の場所へとたどり着く。

「ウェンリル様、アレグラ様、アキラ様、到着しましたよ」

「そうか。アキラ、アレグラ、降りよう」

そうして馬車を降りたアキラの目に飛び込んできたものは、本当に美しい風景だった。

——太陽の光を反射し、光り輝く水面。

——水面の上で踊るように輝く水蒸気。

——そして、そこまで見えるような美しい水。

——とどめは、そのまわりに広がる森の緑だ。

「すごい……」

「きれいだろう？　僕たちは、これをアキラに見せたかった」

その美しさに魅せられているアキラは、ふらふらと湖に近寄り、水に手を浸ける。

「冷たい。気持ちいい……」

「ここは、国民全員の憩いの地なんですよ。神の力の宿る湖。水の神、ジブリール様のお力の源となる場所なんです」

アレグラはそう言って、アキラの横で湖に手を浸ける。適正属性が水のアレグラにとって、ここは本当に聖地のような場所なのだろう。

「水属性の私にとっては、ここは魔力の回復に最適の場所なんです」
「よ」

湖は癒し場所

「ここ、空気が優しいな。気持ちいい」

アキラはそう言いながら、自らの心臓あたりに手をかざす。嘗て、自らの意思で、自らの望みで刃を貫かせた場所。未だに傷跡がくつきりと残った胸元。

アキラは無意識のうちにその場所に触れていた。

「気になりますか？」

「……何が」

「あなたの胸の傷跡です。ちょうどいいので、願ってごらんなさい。ジブリール様が聞き入れてくだされば、傷跡も消えると思いますよ」
「———どうでもいい」

どうせ、またいつか新たにこの場所に傷が出来るんだから。アキラは心の中で小さく呟く。もちろん、アレグラやウエンリルには聞こえないよう、そんな危ないことを考えていることを悟られないように気をつけながら。

事実、アキラは未だに生きようとは一切考えていなかった。とにかく死ぬことしか考えていなかった。

アキラが望むものは、死しかないのだから。

生きることなど望まない。死を以って、あの両親を苦しめてやる。

ああ、そういえば日本で私はどうなっているのだろうか。行方不明扱いなのだろうか。それなら、あのクソ親共は喜んでいるだろうよ。

だが、遺書を残し、その場に血痕を残して消えたんだ、それなり

にマスコミによって排除くらいはされているかもな。

このほのぼのとした落ち着く場所で、アキラはそうやって危ないことを考え続けていたという。

「何で、生きてたんだろ」

小さく呟く少女。そして、しっかりとそれを耳にしている大人たち。そう言うことしか考えられないアキラが不憫で、可哀想で。

だから、彼らはアキラを守ると決めたのだ。愛を知らない幼子、得るべき時期に愛を得られず人を信じることが出来ない子。

ウエンリルは、そんなアキラに気配を消して近寄り、後ろから優しく抱きとめた。

「ちょ！ 離せ、離れろ！」

「嫌だ。絶対に離さない、君は僕の義妹だ」

「知るか！？ 私は望んでない！ 勝手に決めやがって！」

「アキラ、口が悪いよ。これ以上悪い言葉を使うなら、しばらく君の口を塞いでしまっよう？」

ウエンリルがそう言った瞬間、アキラが弾かれるようにウエンリルから離れる。理由は簡単、口を塞ぐという、その言葉だ。

アキラにとって、口を塞がれるのは両親からの虐待を思い出す、嫌なことなのだ。両親を嫌っていても、離れていても体はその恐怖を覚えているのだから。

「ん？ どうした、アキラ？」

「……っわるな……！」

「どうしたんです？ 大丈夫ですか？」

「近寄るな触るな！ 誰も、私に触れるな！！」

アキラは叫び続ける。近寄る者全てを阻み、ただただ、叫び続けた。

「来るな触れるな近寄るな！ あっち行け！ 来るな！」

「どうしました！？ お兄様、何をしたんですか！？」

「いや……」

「うるさい来るな放っておけ！ お前たちだけ帰れ！」

「そんなこと、出来るはずがないでしょう！」

「いいから帰れ！ で、私のことなんて忘れる！ もう何も関係ない！」

アキラの叫びは止まらない。それが、どれだけ人を嫌っているのがよく分かる。アキラが、どれだけ人を恨んでいるのかも。

「家族なんていない！ 大事な人なんていない！ 人なんていない！」

「お、落ち着きなさいアキラ」

「落ち着いてるっ！ 無関係の人間如きが私に命令するな！」

既に冷静さを失っているアキラ。それを止めようとするウェンリルとアレグラ。だが、言の葉のチカラという圧倒的な力を持つアキラを前にしては、最早敵にすらもなり得なかった。

『近寄るな』

アキラの、そのたった一言でウェンリルとアレグラはアキラに近寄ることが出来ない。言葉をかけて落ち着かせるしか方法がない。

最後の手段として、気絶させるという手も、今のアキラには使

ようがないのだ。

「アキラ、落ち着け！ 深呼吸するんだ！」

「黙れ！」

二人が何を言っても受け入れない。アキラの心は完全に閉ざされたまま。愛を教えようと決めたアレグラとウエンリル。

だが、今はその教えるべき対象に完全に拒絶されている。

愛を、人を愛するということがどれだけ幸せか、アキラに教えてあげたかった。

人を信じられる生活がどれだけ安心できるものか、教えるつもりだった。

だが、その少女は今、我を失って完全に暴れているようなものだった。

「もう、いい……。やっぱり人は信用ならない。人は、みんな敵……」

その呟きが本当に可哀想で、哀れで。だから、アレグラはアキラを引き取りたいと王に願い出た。兄にもそれを納得させた。

アキラに、新たな家族となった義妹に、人を信じるということを教えるつもりだった。

それなのに、アレグラは全く信じられておらず、一度会っただけのアリサの方が、アキラには信用されていた。

「大丈夫。大丈夫です、アキラ。だから、だから落ち着きましょう？ ここには、あなたを傷つける者はいません」

信じて欲しかった、その言葉を。だから、アレグラはアキラへと

近寄った。アキラの操る言の葉の力で阻まれながらも、それでも近寄る。

そして、ぎゅっと抱きしめた。アキラが痛がるうが関係ないほど、強く、強く。

「大丈夫ですよ。私たちが、あなたを守りますから」

「うるさい！ そう言ってたって、どうせいつかはなくなる！

それなら、最初からいらない！ 離せ！」

「私たちはいなくなりませんよ。あなたが望むなら、ずっとそばにいます」

「嘘はもう十分だ！ 離せ！」

「嘘じゃありません。あの日言いましたよね？ 私があなたを傷つけるようなことがあれば、殺してもかまわない、と。そんなことをするつもりがないからその約束が出来る。——私は、あなたを守り続けます」

そして、その言葉が最後。アキラの耳に届いた、最後の言葉だった。

敵は心の内にあり（前書き）

お久しぶりです。

やっと完成したのでアップします。

確認する余裕がなかったので、
誤字脱字あるかと思いますが、
見つけたらお知らせくださるとありがたいです。

敵は心の内にあり

暗い。真っ暗だ。でも、落ち着く。白よりは黒のほうがいい。まわりには誰もいない。でも、落ち着く。人がいるよりも、一人のほうがいい。

ここは、とても快適な空間だ。

ここに味方はいない。まあ、もともと味方なんていないのだから。それと同様に、ここには敵もいない。敵となりうる人自体がいない。

だから、ここは快適なんだ。

流れに逆らわず、闇に飲まれてしまえばいい。闇に包まれていれば、何も苦しいことなんてないのだから。

—— 私に、光なんて必要ないんだ。

ああ、闇の中は気持ちがよくすぎる。闇の中は眠たくなる。逆らわずに眠ってしまおう。どうせ、ここには私以外誰もいないんだから。

「アキラ！ アキラ！？」

突然気を失ったように倒れたアキラをアレグラは急いで抱き上げ、様子を診る。深く眠っているのか、何をしても反応の無い少女。なんの反応も返せない、哀れな少女。

何もかもを拒んで、魔力を発動させた。何もかもを拒み続けて、魔力を暴走させた。

人を信じられないその心が、魔力のコントロールを怠らせた。

「アキラ、あなたは私たちが守りますから。だから——死なないでください」

「アレグラ、馬車へ。屋敷へ戻ろう」

「はい。アキラ、今から屋敷へ戻りますからね。大丈夫です、何も怖くありませんから」

アレグラは眠るアキラを抱き上げて馬車へと乗り込む。それでもアキラは目を覚ます気配は無い。眠ったままだ。

いつもならば、アキラは軽い眠りにしか落ちないため、眠っているときに手を少し触れただけで目を覚ました。だが、今は違う。

完全に深い眠りに落ちているため、いくら触れようが、何をしようがアキラは何に反応も見せなかった。——それが、アレグラを心配させた。

「このまま、目を覚まさないなんてことは、許しませんからね。絶対に、あなたは目を覚まさなくてはなりません」

「アキラの様子はどうかんだ？　大丈夫なのか？」

馬車の中で、アキラを抱きしめたアレグラにウェンリルは問う。

その表情は、本当に心配そうで、悲しそうで。

「呼吸が少々弱いですね。ただ、命に別状は無いと思いますが、このままずっと目を覚まさなければ危険です」

「……屋敷へ急いでくれ」

慣れない場所よりも、慣れた場所のほうが落ち着いて、目を覚ましてくれるのではないかという希望を元に、ウェンリルは馬を操る御者に告げる。

その間も可愛い義妹を見つめるが、その表情は何だか臆気で、何かあったら、違う、何もなければいつの間にか消えてしまうのではないかと思えるほどだった。

彼らは、アキラが今一番落ち着ける場所にいることを知らない。
アキラがその場所に執着していることを知らない。
アキラは、今の場所、暗闇を心から愛していた。

白い色がキレイな少女。白がキレイだからか、反動的に黒が好きだった。

今のアキラの目の前の色は、前面が黒。大好きな色に包まれた空間をアキラは愛していたのだ。

「目を、覚ましてください、アキラ」
「起きてくれ。僕が悪かったから、お願いだ」

だから、今のアキラに二人の声は届かない。漆黒の闇は内からの音も、外からの音も全てを遮断してしまう。
アキラは完全に、独り、だ。

「……最後の手を使います。お兄様、日が変わっても私が目を覚まさなかったらそのときは、——お願いします」

この場合のアレグラの願いとは、呼べということだ。アレグラは最後の手段として、医療従事者としてアキラの心に入ろうとしているのだ。

だが、人の心というものはどうなっているか分からない。単純に場所かもしれないし、複雑な迷路のようになっているかもしれない。その中で、戻ってこれないときのために、呼んでもらうのだ。

人は、自分と一番かわりの深い人間の声には、意識がなくても反応できる、耳に届くのだ。

何かあったら、その声を頼りに帰ることができるが故に、アレグラは兄にそう頼んでいるのである。

「アレグラ、アキラを頼む」

「任せてください。絶対に、連れ戻します」

「随分と真っ暗ですね。これがアキラの心ですか」

アキラの心の中に入ったアレグラは、まず状況を確認するためにあたりを見渡すのだが、広がるものは一面の闇、だ。

「アキラの心に、光というものは存在しないのですね」

それが、とても悲しくて。自分たちではまだ光になることができないということをやまやまと知らされているのだ、悲しくもなるだろう。

だが、アレグラ自身は気づいていない。この闇の中で自分の姿が視認出来ることの不自然さに。

普通、一片の光も射さない場所では、何も見えないはずだ。その場にいるのならば、自身の姿の視認などもってのほかのはずである。

それでも、アレグラには自身の姿の視認が出来ていた。だが、その不自然さには気づくことが出来なかった。

そのことがこの世界で一番大きな鍵を握っているというのに、その鍵を持っているのに使うことが出来ない。それが致命的だった。

内からの音も、外からの音も遮断される世界。ここで、そのことに気がつかないのはアレグラ自身の命すら危険に晒していることに、アレグラは終ぞ気づくことはなかった――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1506v/>

言の葉のチカラ

2011年11月17日09時13分発行